



Title	日・タイ推量表現にかかわる認識的モダリティ形式 : 現実と推論が異なる場合の「ハズダ」
Author(s)	ラッタナポンピンヨ, プラッチャヤポーン
Citation	日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 139-146
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日・タイ推量表現にかかわる認識的モダリティ形式 — 現実と推論が異なる場合の「ハズダ」—

ラッタナポンピンヨ プラッチャヤポーン

1. はじめに

日本語の推量表現について習得する際、タイ人学習者は一対一の意味で学ぶ。その中で、「ハズダ」は、タイ語の「nâaca」に相当すると言われている。「ハズダ」の訳として『みんなの日本語』や『日本語表現文型 200 初・中級』なども「nâaca」を挙げている。

(01) 来るハズデスよ。きのう電話がありましたから。

nâaca maa na phrú mûawaan thoo maa bòk wâa ca maa

(みんなの日本語タイ語版：p.111)

しかし、事例にあたってみると、一対一に翻訳できない場合もある。例えば、次の(02)である。

(02) 状況：今日、話し手は大学で山田さんに会っているが、いつも山田さんが出ている授業には、山田さんの姿が見えない。話し手は友だちに山田さんが大学に来ているか、聞かれて答える。

(02A) 山田さんは今日大学に来ているハズダ。

(02B) wannîi khunyamada maa mahăawítthayalay

今日 山田さん 来る 大学

山田さんは今日大学に来ている。

野田(1984)によれば、推論するようになって当然だが、現実とは違う場合、日本語では(02A)のように「ハズダ」を使う。しかし、タイ語に訳すと、(02B)のように無形モダリティ形式¹で表す。(02)の状況で、タイ語では「nâaca」を使うと、不自然である。この場合の「ハズダ」は、典型的な「ハズダ」と同じ形なので、外国人学習者にとって捉えにくいものだと考えられる。

本稿では、現実と推論が異なる場合の「ハズダ」を中心にし、タイ語と対照することによってこの「ハズダ」を明らかにする。

2. 「ハズダ」と「nâaca」

2.1. 「ハズダ」

仁田(2000)では、「ハズダ」は論理的必然性や推論の様態に関わるものだと述べている。日本語記述文法研究会編(2003)は、「ハズダ」は基本的に何らかの根拠によって、話し手がその事柄の成立存在を当然視しているということ(論理的推論)を表すと説明している。また、益岡(2007)によれば、推論から得られる当然の帰結を表すものである。つまり、「ハズダ」は、何らかの根拠によって推論を表すものだとまとめることができる。例えば、(03)のようである。

(03) 佐藤はタバコは吸わないから、禁煙席にいるハズダ。

(日本語記述文法研究会編 2003)

(03)の場合には、話し手は佐藤がタバコを吸わないことを基づいて、タバコを吸わない人がレストランで禁煙席を選ぶことが当然なことで、「禁煙席にいる」と推論する。

2.2. 「nâaca」

「nâaca」は、ラッチャニー(1991)によれば、認識的モダリティの中に「弱い推論」があり、それは「ある事柄の真偽を確認ではないが、ある既知の情報を根拠として考えると推理的に、『当然そのような結論になる』ということを表す」という。また、田中(1996)では、「nâaca」は、物事の経過などから推して、現在の事態が当然そうなるべき事情・環境にあるということを示す。つまり、タイ語の「nâaca」は、根拠に基づいて推論を表すものである。

(04) khanci tua níi rian léew nâaca ?àan dây

漢字 助数 この 習う 完了 nâaca 読む できる

この漢字はもう習ったから、読めるはずだ。

(ラッチャニー1991)

(04)では、漢字を習った人なら読めるという一般常識を根拠として考えると、相手がこの漢字を習ったことを基づいて、話し手は「読める」と推論する。

2.3. 「ハズダ」と「nâaca」の対応関係

以上の先行研究を見ると、日本語の「ハズダ」はタイ語の「nâaca」に対応すると考えられる。

基本的に何らかの根拠によって推論を表す「ハズダ」は、タイ語の「nâaca」で対一的に対応する。次の(05)ようである。

(05) 状況：警部は関係者の相原と話している。

(05A) 相原さんは美大生だそうですね。ならば、わたしよりも美術関係にお詳しいハズ
ダ。

(05B) khunaihara rian thîi mahăawitthayalaysĩnlapa châymăy khrap
相原さん 勉強 で 美術大学 疑問語 終助詞
thâa yàaṅnánkô nâaca rûu rûaṅ sĩnlapa mâak kwàa phǎm
もし そう nâaca 知る こと 美術 たくさん より 僕
相原さんは美大生ですね。そうなら、わたしより美術について詳しいはずだ。
(謎解きはディナーの後で 2)

(05) では、警部は相原さんが美術大学で勉強していることに基づいて推論している。美術大学の学生は警察より美術のことが詳しいのは当然なことである。このような場合、日本語の「ハズダ」とタイ語の「nâaca」は対応する。

さらに、その事柄の成立が当然のことであるということをその原因を知ることによって、その場で納得するという用法もある。(野田 1984、日本語記述文法研究会 2003)

(06) 状況：麗子は、相手が「吉本瞳が人並み以上に戸締まりに気を使う人で、鍵をかけ忘れることなんて絶対ない」とい言ったことに対して、麗子が次のように言う。

(06A) 確かにそうね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけたハズよ。

(06B) cĩṅdûay sĩna tɔɔn ʔòk pay khâaṅnòk
本当 終助詞 とき 出る 行く 外
yoshimotohitomi nâaca lók hōṅ léew la
吉本瞳 nâaca かける 部屋 た 終助詞
そうですね。吉本瞳が外出の際に鍵をかけたはずよ。

(謎解きはディナーの後で 2)

(06) では、麗子が影山の理由を聞いて、「吉本瞳は人並み以上に戸締まりに気を使う人で、鍵をかけ忘れることなんて絶対ない」という理由が当然であり、納得する。このような場合、両言語は対応する。

3. 日本語の「ハズダ」とタイ語の無形モダリティ形式

2.3のように日本語の「ハズダ」とタイ語の「nâaca」は一対一的に対応する。しかし、実例にあたってみると、一対一的に翻訳できない場合もある。「ハズダ」は、根拠に基づいて推論する以外の用法も存在する。例えば、野田(1984)では、「推論するようになって当然だが、現実とは違うという使い方もかなり多い」と説明されている。また、日本語記述文法研究会(2003)によれば、「ハズダ」の文は、「本来はこうである」ということに加えて、「現実とは違う」ということを意味することがあるという。このような「ハズダ」をタイ語に訳して「nâaca」を使うと、不自然になる。次の例文(07)と(08)のようである。

(07) 状況：結婚式が始まって一時間ほど経過したが、花嫁である沢村有里の姿がいつの間にか会場から消えている。不審に思った麗子が、執事の吉田をつかまえて問いただした。吉田は訝しげな表情で答える。

(07A) おや、先ほどまではいらっしゃったハズなのに

(07B) á mûwakíi kôo yaŋ yûu ləəynîi khráp
あ 先ほど も まだ いる 終助詞 終助詞
おや、先ほどまだいらっしゃった。

(謎解きはディナーの後で)

(07C)*á conthuwŋ mûwakíi nâaca yûu ləəynîi khráp
あ まで 先ほど nâaca いる 終助詞 終助詞
おや、先ほどまではいらっしゃったはずなのに

(08) 状況：執事の影山は刑事である麗子に殺人事件の謎を解くための大事なヒントを与えたが、麗子はまだ犯人の正体がわからない。

(08A) お嬢様は国立署捜査一課の現職刑事のハズ。

(08B) khunnûu pen câunâathîisòbsûan hɛɛŋ sɔɔnɔɔ kunithaci na khráp
お嬢様 である 現職刑事 の 警察署 国立 終助詞 終助詞
お嬢様は国立署捜査一課の現職刑事である。

(謎解きはディナーの後で)

(08C)*khunnûu nâaca pen câunâathîisòbsûan hɛɛŋ sɔɔnɔɔ kunithaci
お嬢様 nâaca である 現職刑事 の 警察署 国立
na khráp
終助詞 終助詞
お嬢様は国立署捜査一課の現職刑事のはず。

(07)では話し手である吉田は、一時間前に花嫁がいたことを自分の目で見て知っており、(08)では話し手である影山は麗子が刑事だということを知っている。すなわち、(07)(08)では話し手が事実を確認できる。したがって、この状況においてタイ語で「nâaca」を使うと不自然になる。

一方、ラッチャニー(1991)でも述べられているように、タイ語では「nâaca」は、話し手が事実性は確認できないが、何らかの情報を根拠にし、そこから推論すると当然そのような結論になるという意味を表す場合にしか使用できないため、「nâaca」を使用すると不自然になるのである。

したがって、例えば

(09) 山田さんは今日大学に来ているハズダ。

といった例の場合、話し手が今日大学で山田さんを見たり、誰かに山田さんが大学にいることを聞いたりした場合は不自然となるが、その事実を知らず、(09B)のように何らかの情報を根拠に推論している場合、「nâaca」を使用することができる。

(09A) 状況：今日、話し手は大学で山田さんに会ったが、いつも山田さんと一緒に出る授業が始まると、山田さんがいなかった。話し手は山田さんが大学に来るか、聞かれて答える。

wanníi khunyamada maa mahăawíthayalay

今日 山田さん 来る 大学

山田さんは今日大学に来ている。

(09B) 状況：話し手が山田さんが大学に来るか、友達に聞かれた。話し手は山田さんには朝から会ってないが、今日授業があるため、山田さんが来ると推論する。

wanníi khunyamada nâaca maa mahăawíthayalay

今日 山田さん nâaca 来る 大学

山田さんは今日大学に来ているはずだ。

以上から、日本語の「ハズダ」は事実性を確認できる場合もできない場合も使用できるが、タイ語の「nâaca」は、話し手が事実性が確認できない場合にのみ使用できることがわかる。

4. 伝達動詞+「ハズダ」

小説やドラマの中では、「言う」「教える」などの伝達動詞がよく共起する。例えば、40例の中、12例がこれらの動詞と共起例だった。具体的な例は(10)(11)に示す。

(10) 状況：浅野支店長は半沢に貸金の稟議書を早く提出するよう求めたが、半沢はその稟議書をまだ十分に確認していなかったため、提出しなかった。浅野支店長は不満の意を示す。

(10A) これは緊急を要する謀議だと言ったハズデス。

(10B) phǒm bòok léewjai wâa rûaj níi tǒng anumát dùan
僕 言う た と こと この 要 承認 緊急
僕は、このことが緊急に承認する必要があると言った。

(半沢直樹 第1話)

(11) 状況：半沢たちは5億円の融資を取られてしまった。浅野支店長はその全責任を半沢一人になすりつけようと画策する。浅野支店長の画策を知っていた半沢は怒って言った。

(11A) 「私が全責任を持つ」あの時あなたは確かにそうおっしゃったハズダ。

(11B) phǒm ca rǎp phitchhǎp thǎngmòt ?eeg phǒm dǎyyin khun phūt chátcen
僕 未来 持つ 責任 全部 一人 僕 聞こえる あなた 言う 明らか
「私が全責任を持つ」あの時あなたは確かにそうおっしゃった。

(半沢直樹 第2話)

(10)(11) は、両方とも話し手が不満や怒りを感じている場面である。日本語では「ハズダ」を使うと、不満や怒りを感じながら、「言ったのに、なぜ言ったとおりにしない」という意味になる。しかし、タイ語では「nâaca」を使うと、事実性が確認できないため推論する、という意味になる。そのことを本当に言ったかどうか証明できないため、不自然となる。

(10B') *phǒm nâaca bòok léewjai wâa rûaj níi tǒng anumát dùan
僕 nâaca 言う た と こと この 要 承認 緊急
僕は、このことが緊急に承認する必要があると言ったはずだ。

(11B') *phǒm ca rǎp phitchhǎp thǎngmòt ?eeg tɔɔnnán khun nâaca phūt
僕 未来 持つ 責任 全部 一人 あの時 あなた nâaca 言う
「私が全責任を持つ」あの時あなたはおっしゃったはずだ。

以上の例のように、話し手が不満や怒りを感じている場合、日本語では「ハズダ」で話し手の不満や怒りを表すことができるが、タイ語では「nâaca」を使うと、事実性が確認できないために推論する、という意味になる。このように、話し手の不満や怒りを表す場合、伝達動詞＋「ハズダ」で話し手の不満や怒りを表すのは、日本語の特徴だと考えられる。

5. おわりに

日本語の「ハズダ」とタイ語の無形モダリティ形式に関しては、日本語の「ハズダ」は話し手が事実性を確認できる場合もできない場合も使用されるが、タイ語の「nâaca」は、事実性が確認できない場合にのみ使用される。そのため、話し手にとって事実性が確認できる情報が現実と違う場合、タイ語では過去の事実として述べる。それに対して、日本語では自分が知っている事実をそのまま述べるのではなく、「ハズダ」を使って推論として表す。また、このような「ハズダ」は、伝達動詞と一緒によく使われており、話し手が不満だったり、怒ったりしている場面で、「言ったのに、なぜ言ったとおりにしない」という意味として使われている。

本稿では、「ハズダ」のみ扱っているが、実際は、他のモダリティ形式でも、タイで使用されている教科書のように日本語の推量表現を一対一的にタイ語に翻訳できない場合もある。RATTANAPONGPINYO (2016)によれば、その原因は、日本語には、話し手がある命題を確か・不確かなものとして捉えるかによってモダリティ形式を使用するが、タイ語の場合、さらに話し手がその命題の事実性を確認できるかどうかについても考える必要があるからだという。

【注】

- 1 仁田 (2000) も認めている。判定のモダリティの中に、「概言」に対立する「確信」を設定している。「確信」を表すには、確かさの度合いを差し出す副詞などがあり、その中に無形モダリティ形式が挙げられている。

【参考文献】

- 田中寛 (1996) 「タイ語における推量と認識の構文－日本語との対照比較の視点から－」
『大東文化大学紀要』34, pp. 215－257
- 仁田義雄 (2000) 「認識モダリティとその周辺」『日本語の文法 3 モダリティ』森山卓郎・
仁田義雄・工藤浩, pp.79－159, 岩波書店
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 日本語文法学会 (2014) 『日本語文法辞典』大修館書店
- 野田尚史 (1984) 「～にちがいない～かもしれない～はずだ」『日本語学』3(10)明治書院
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- ラッチャニー・ピヤマワディー (1991) 「日本語とタイ語のモダリティ対照研究」筑波大学
博士論文
- RATTANAPONGPINO PRATYAPORN (2016) 「日・タイ推量表現にかかわる認識的モダ
リティ形式」大阪大学修士論文

【参考テキスト】

- スリーエーネットワーク『みんなの日本語』、スリーエーネットワーク
- ETSUKO TOMOMATSU. (2545) กุญแจสู่ 200 ประโยคพื้นฐาน ภาษาญี่ปุ่นขั้นต้นและกลาง. แปลโดย
วีรวรรณ วชรจิตถ. กรุงเทพฯ : ภาษาและวัฒนธรรม สมาคมส่งเสริมเทคโนโลยี (ไทย-ญี่ปุ่น) (ETSUKO
TOMOMATSU (2002) 『どんなときどう使う日本語表現文型 200 初・中級』泰日経済
技術振興協会)

【用例出典】

- 東川篤哉(2010)『謎解きはディナーのあとで』小学館
- 東川篤哉(2011)『謎解きはディナーのあとで2』小学館
- 八津弘幸(脚本)(2013)ドラマ『半沢直樹』(原作 池井戸潤)『半沢直樹シリーズ』)
- อิงฉิกาวะ โทคุยะ. (2555) นักสืบหลังมือค้ำ. แปลโดย เมธิณี นุชนาคา. กรุงเทพฯ: สยามอินเตอร์บุ๊คส์ (東川
篤哉 (2012) 『謎解きはディナーのあとで』(メティニー・ヌッチャナカ訳者) サイア
ムインターブック)
- อิงฉิกาวะ โทคุยะ. (2556) นักสืบหลังมือค้ำ 2. แปล โดย วิภา หวัง. กรุงเทพฯ: สยามอินเตอร์บุ๊คส์ (東川篤
哉 (2013) 『謎解きはディナーのあとで2』(ウィナー・ワン訳者) サイアムインターブック)